

暴力の連鎖..

人間に対する暴力と動物虐待の関連性

人間社会の暴力の構図の中に動物虐待を入れるべきであるという考え方が世界的に最近注目されるようになってきているようである。児童虐待、家庭内暴力、老人虐待、そして暴力的犯罪等の陰に見え隠れする動物に対する虐待行為の意味を専門家の意見を交えて論じる場を提供する。

《主催》

公益社団法人日本動物福祉協会／動物との共生を考える連絡会

《座長》

山崎恵子氏（ペット研究会「互」主宰）

《演者》

「種の垣根を越えた暴力の対策：動物虐待と人間に対する暴力の関連性を探ることによって社会資本整備及び人と動物の苦痛の軽減を達成する」

フィリップ・コー氏（ナショナルリンク コアリッション コーディネーター）

「反社会的行動と動物虐待の関連性

〜何故、動物虐待を反社会的行動のリスク要因として捉えるべきか〜

山崎佐季子氏（ペット研究会「互」／社会福祉学博士）

Symposium III

シンポジウム III

“The Cycle of Violence: The Connection Between Violence to Humans and Animals”

In recent years the idea of including animal abuse in the contemplation of violent acts toward human beings is gaining wider acceptance. An attempt to consider acts of animal abuse coexisting with child abuse, DV, the abuse of the elderly as well as with other violent crimes will be made with input from professionals in the field.

Organizer: Japan Animal Welfare Society, Japanese Coalition for Animal Welfare

Chairperson:

Keiko YAMAZAKI (Founder, Companion Animal Study Group ‘Go’)

Speakers:

“Species-Spanning Violence Prevention: How Addressing the Link Between Animal Abuse and Human Violence Can Improve Social Capital and Reduce Human and Animal Suffering”

Phil ARKOW (Coordinator, National Link Coalition)

“Associations Between Antisocial Behaviors and Animal Abuse — Why Animal Abuse Should be Perceived as a Risk Factor for Antisocial Behaviors —”

Sakiko YAMAZAKI, Ph.D. (Companion Animal Study Group ‘Go’)

反社会的行動と動物虐待の関連性 ～ 何故、動物虐待を反社会的行動のリスク要因として捉えるべきか ～

Associations Between Antisocial Behaviors and Animal Abuse — Why Animal Abuse Should be Perceived as a Risk Factor for Antisocial Behaviors —



ペット研究会「互」／社会福祉学博士・山崎 佐季子
Sakiko Yamazaki, Ph.D.,
Companion Animal Study Group 'GO'

○山崎佐季子 紹介に預かりました山崎佐季子と申します。【スライド 01】

ちょっとだけバックグラウンドの追加をさせていただきます。

先ほどソーシャルワークの専門という話が出ましたが、私は今、紹介にあったように、社会福祉学研究科を出ておりますので、學術屋です。実践はやっておりません。なので、學術上の専門は人間の社会福祉学、子ども虐待が一応専門ですけれども、ずっと研究をしている間は、このいわゆる連鎖の研究をしてまいりました。

ちなみに現在は、本日はペット研究会「互」という動物との共生を考える連絡会の幹事団体の所属として発表させていただいてますけれども、通常の業務はヒューメイン・ソサエティー・インターナショナルという国際的に活動している動物福祉の団体のコンサルタントをやっておりますので、職業上は動物側の人間です。

私からは、反社会的行動と動物虐待の関連性ということで、なぜ動物虐待を反社会的行動のリスク要因として捉えるべきかというのを主に學術、研究の側面から細かくお話ししていきたいと思います。

初めになんですけども、アーコー先生も繰り返していらっしゃいましたように、近年、動物虐待と対人暴力を含む、あらゆる反社会的行動の関連性が學術の世界で徐々に実証されつつあるということが言えます。

これがきょう最も覚えて帰っていただきたい1点なんですけれども、具体的に今回の報告の概要はこちらにお示ししたとおりです。

まず、動物虐待とは一体何ぞやということについてお話ししたいと思います。【スライド 02】

動物虐待なんて、犬を蹴ったり、殴ったり、猫を銃で殺したり、誰でも見ればわかるじゃないかと言う方は多いと思いますけれども、実は學術の世界ではそういうわけにはいかないんです。動物虐待という概念の定義をすることが意外と難しいんです。なので、それについてまず1点お話しします。

次にお話ししたいのは、動物虐待が何で起こるのかというその背景を説明するために、今まで使われてきた理論や視点などを概観したいと思います。

そして3点目が本題。動物虐待と対人暴力というの

は一体具体的にどういうふうに関連しているのかということをお話しします。

アーコー先生のお話でも何度も出てきましたけれども、動物虐待というのは、大きく分けると家庭環境における対人暴力、子ども虐待やDVと関連しているというのがまず1点。そして、犯罪と関連しているというのが2点。

主にこの2点について、動物虐待がどういうふうに関連しているということが示されたかという學術レベルのお話をしたいと思います。

最後に、どうして動物虐待を反社会的行動のリスク要因として捉えるべきなのかということについて、人間側の専門家を説得する際に、特にこういう動物虐待が危ないんだよということをどう伝えればいいかというのを、研究結果を示しながらお話ししたいと思います。

まず、動物虐待の定義について、話します。【スライド 03】

残念ながら、學術とか研究の世界では、これが定義だという、みんなが賛成するような動物虐待の定義というのはまだないんです。

最も頻繁に學術の世界で使われているといわれている定義が、ここの吹き出しに入った、アシオンとシャピロという研究者により提唱されたものです。

意図的に動物に傷み、苦しみ、抑圧を与え、及びまたは動物を死に至らしめる社会的に許容されていない行為と定義づけられています。

この定義の特徴の1つとしては、社会的に許されていない行為のみなんです。なので、ペットを殴ったり蹴ったりするのは動物虐待に当たります。社会的に許されていることではありません。

ただ、社会的に許されている動物の搾取の方法。例えば工場的な畜産とか、認められている狩猟とか、動物実験とか、そういうようなものはこの定義には含まれていません。

あともう一つ、社会的に許されていない行為なので、行為の欠如、要するにネグレクトなどはこの定義によると、動物虐待には含まれていないことになるんです。

これが一応最もよく使われているものと言われてるんですけども、本当に學術の世界の動物虐待の定義

というのはピンキリです。こういうような社会的に許容されていない行為だけを定義づけるものもあれば、バーミュレンらは動物虐待を、動物福祉を侵害するあらゆる行為、あと行為の欠如としていて、こういうような行為やこういうような行為の欠如が動物虐待に当たるんだよという類型化してリストをつくった状態で定義を示しています。

1つ、いろいろ定義を見て言えることは、動物虐待というのはざっくり言ってしまうと、動物の福祉を何らかの形で著しく侵害する行為、もしくは行為の欠如なんだよというのが全ての虐待の定義の共通点と言えると思います。

もう少し動物虐待の定義について、引き続きお話しします。

動物虐待の話をするときというのは、少なくとも学術の世界では一般的にここに挙げられている4つのカテゴリーに分けて話をする人が多いんです。【スライド04】

1つ目のカテゴリーが身体的虐待。2つ目が心理的虐待。動物に心理的な負担を与えることです。3つ目が性的虐待。これあるんです。動物に性的行為を強要するという。最近研究でも取り上げられています。4つ目に行為の欠如、ネグレクトが入ります。

この4つのカテゴリーというのは、実は子ども虐待を一般的に類型化するときと同じカテゴリーを使っています。

最近もう一つ言われているのが、この動物を戦わせる行為。例えば闘犬とか闘鶏とかあと闘牛とか、動物を無理やり戦わせる行為も虐待に当たるんだよということが言われています。

もちろん、アーコー先生のお話で何度も出てきたので、もう皆さん当たり前と思ってらっしゃると思いますけれども、動物虐待は重大な社会問題であるという認識が既に欧米諸国では確立されています。

ここら辺、ちょっと話がかぶりますけれども、例えばアメリカの自治体なんかは、動物虐待の査察官、動物虐待の調査をしたり、場合によっては逮捕権を持っていたり、動物の押収権を持っていたり、そういう動物虐待の専門家がいますし、日本よりも厳しい罰則があったりするわけです。

例えばオレゴン州なんかは、獣医師が動物虐待の通報義務を怠った場合、最高1,000ドルの罰金が法律上可能になっています。

ちなみに、動物虐待の話をするときには、いわゆる研究の世界でやられているものというのは大体ここです。いわゆる動物を殴る蹴ると、対人暴力がどういうふうに関連しているかということを見ているものが多いです。

最近、ここら辺も研究で扱われ始めています。

あと、ネグレクトです。

日本の法律における罰則の対象というのは、この身体的虐待とネグレクト。

ここまで定義のお話をしてきたんですけど、何となく皆さん、もう感づいていると思うんですけども、なぜ動物虐待の定義が一筋縄ではいかないかということをご説明させていただきます。

まず、動物虐待の対象はどうするのか、どういう動物を虐待すると動物虐待に当たるのかということです。動物虐待の対象というのは、普通の日常会話をしていると、大体は哺乳類、犬・猫とか、あと野ガモ事件であるような鳥とかです。昆虫とか魚とかそういう下等な動物に対して暴力行為を行った場合というのはどういうふうに研究上定義づけるのかということがまず1つ課題としてあります。【スライド05】

あと、行為。どういう行為が動物虐待に当たるのか。先ほどちょっとお話ししましたが、行為だけなのか、行為の欠如はどうするのかということ。あと、どの程度ひどい暴力行為から、いわゆる動物虐待と定義づけるのか。どの程度動物の福祉が侵害されれば、虐待と認定されるのかということです。

3つ目の難しさというのが、文化的な違いにあります。さっきの定義にもありましたが、一般的に社会的、文化的に許されている行為で動物を搾取したり、動物に暴力的な行為をすることは動物虐待に当てはまらないのか、当てはまるのか。

具体的な例を挙げると、闘牛とか闘犬とか、動物を戦わせることというのは文化的な価値がある行事としてむしろ保護されていることが多いです、自治体によっては。こういうふうに文化的に価値がある行事というのは、動物虐待に当てはまるのか、当てはまらないのか。

あと、社会的に普通に行われている行為。例えば屠殺とか動物を使った実験とか、そういうふうなもので動物を搾取している行為というのは動物虐待に当てはまるのか、当てはまらないのかということも考えていかなければならない課題の1つとしてよく挙げられています。

ここからは動物虐待が起こる背景について、ざっと説明していきます。

残念ながら、動物虐待全てを説明し得るこれという1つの理論というのは、いまだに明らかになっていなくて、学術の世界ではいろいろな理論が飛び交っている状態です。なので、今まで言われてきていることをざっと整理したものを概観させていただきます。【スライド06】

まず、動物虐待がなぜ起こるかに関係している要因として挙げられるのが、共感です。これは至極当然のことなんですけれども、動物が置かれている状況などに共感できない人間というのは、動物を虐待する傾向にあるのではないかということが研究の世界では言われています。

あと、もう一つ動物虐待に関連していると指摘されている要因が、制御感。この制御感というのは、自分が相手をどれくらいコントロールしているかという認識のことなんです。例えば、保護者がいて、その保護者が自分の子どもの行動管理をすごくきちんとしてできていると

思っていれば、その保護者というのは制御感が高い保護者です。逆に、自分の子どもをうまくコントロールし切れてないなと思っている保護者というのは制御感が低い保護者になります。

制御感について言われているのが、子どもとか動物に対する制御感が低い保護者というのは、保護者として適切な対応方法がわからなくて、子どもや動物の行動を変えるために不適切な方法、すなわち暴力や虐待を使ってしまう可能性が高いと言われています。



引き続き、動物虐待がなぜ起こるかについてです。【スライド 07】

もう一つ、動物虐待の説明をするときによく使われているのが、緊張理論というものです。

緊張理論いわく、緊張やストレスが動物虐待を直接的、間接的に引き起こすと言われています。緊張とかストレスがかかった人間というのは、そのストレスとかを軽減したりとか、そのストレスの原因となった人間へ報復したりとか、そのストレスにかかわる負の感情にどうにか対応しようとするために、結果、動物虐待を行うと言われています。

これがどういうことかと言いますと、例えば、自分のストレスとか負の感情の原因となっている人間をコントロールするために動物を虐待して、その人を脅して行動管理をするとか、あといわゆる怒りのはげ口として動物に当たってしまうとか。こういうものは緊張理論で説明できるのではないかということが一部の研究者によって言われています。

あともう一つよく使われるのが、社会的学習理論という理論です。

社会的学習理論によると、人間というのは行動を学ぶときに周りの人間がやっているものを見て、それを見て学んでその行動を自分も繰り返すと言われています。社会的学習理論によると、動物虐待というのは周りの人がやっているのを見て、それを目撃して学ぶんだと言われています。

さっきアーコー先生も、動物虐待の目撃というのは危険だよという話をしましたけれども、まさにそのとおりで、動物虐待を目撃した人は自ら動物虐待をしてしまう傾向というのは、本当に数多くの研究で報告されてい

ます。

ということで、ここからは具体的に、研究の結果が動物虐待と対人暴力がどういうふうに関係していることを示しているかということについてお話をしますが、まず家庭内の対人暴力と動物虐待の関連性について見ていきたいと思います。【スライド 08】

済みません、これちょっと古いバージョンの図で、本当はここにさっきアーコー先生がお示したように高齢者虐待の丸も入っているはずなんです。これちなみに、アーコー先生が書いた本からの引用です。

ちょっと話が重複してしまうんですけども、こういう形で家庭内暴力と動物虐待が混在していることが、研究の世界でも約20年ぐらい前から言われるようになっていて、いわゆる連鎖とか関連性の話をしているときは、私たちはこの重複した部分を見ているわけです。

アーコー先生のお話にもありましたように、この重複している部分がどの程度か、重複部分の大きさはまだわからない。だから、必ずしも全ての子ども虐待が動物虐待と一緒に家庭で発生しているとは限らないし、必ずしも全てのDVのケースが動物虐待を伴っているとは限らないということがこういう円の図式化されたものから言えることです。

まず、動物虐待と子ども虐待がどういうふうに関連しているか、具体的な実証研究の結果を示しながらお話ししたいと思います。

子ども虐待と動物虐待が関連しているパターンというのが、大きく分けて3つあります。1つ目が子ども虐待の加害者。ですから、子どもを虐待している保護者なんかが、子どもと一緒に動物も虐待しているパターンです。

このパターンというのは、こういう研究結果を受けて言われているものなんです。【スライド 09】

例えば、デヴィニーらが随分前に実施した研究ですけども、子ども虐待でニュージャージー州のファミリーサービス部局、日本のいわゆる子ども家庭福祉局のようなどころなんですけれども、そういう人間の福祉の専門機関の指導を受けている家族の6割が、何らかの形で動物虐待を行っていたということが報告されています。

こんな研究と一貫して、ロビンらの研究では、被虐待児、虐待されている子どもたちの群と虐待を受けていない一般家庭の子どもとの、ペットを他人に殺される経験をしている子どもの割合を比較しているんですけども、虐待を受けていない一般家庭の子どもたちは、こういう経験をしている子はわずか1割強いたんですが、被虐待児の群では、約3分の1の子どもたちがペットを他人に殺されている経験をしているんです。なので、かなり開きがあるということが、研究結果でもわかります。

同様に、ジルニーという研究者が、さっきアーコー先生が示したグェルフ郡でクロスレポーティングをやっている、チェックリストがありましたよね。まさにあれ

のパイロット研究ですけれども、子ども家庭福祉局のワーカーが子ども虐待が疑われた家庭に行くと、そこではやはり動物の状態も良好ではないということが、結果として報告されています。

子ども虐待と動物虐待が関連しているパターンの2つ目というのが、子ども虐待の被害者、要するに虐待されている子どもが動物を虐待するパターンです。【スライド 10】

これを根拠づける研究結果が、このスライドにお示したものですけれども、例えば、アシオンらが実施した研究では、一般家庭の比較群と性的虐待を受けた子どもの群を比較して、動物を虐待したことがある子どもの割合を比べています。

これでわかったことは、一般家庭の群は動物虐待をしたことがある子どもの割合は3%だったんです。それに比べて、性的虐待を受けた子どもはこの5倍以上、17.9%もの子が動物を虐待した経験があるということがわかりました。

当方も実は日本の児童養護施設の子どもの対象として、インタビュー調査をしたことがあるんですけれども、そこではこういうふうに虐待を受けた子どもたちと比較群の差は出なかったんですけれども、一般家庭の子どもよりも虐待を受けた子どものほうがより深刻な動物虐待に従事する傾向があることがわかりました。

例えば、一般家庭の子どもというのは、動物虐待のレベルといっても、せいぜい犬をひっぱいたりとか猫の尻尾を思いっきり引っ張ったりとかそういう程度だったんですけれども、児童養護施設の子どもの出てきた例なんかは、ひよこを踏み潰しちゃったりとか、トンボとかバッタをはさみとかで解体して内蔵を取り出しちゃったりとか、そういう明らかに深刻な動物虐待が児童養護施設群のほうが圧倒的に多かったということがわかりました。

体罰についても、実は動物虐待と関連性があることが報告されています。動物を虐待した経験のある人のほうが、親に体罰を受けていた傾向があることがわかってるので、体罰を受けた人のほうが動物虐待をしたことがある経験者が多かったということです。

子ども虐待と動物虐待が関連している3つ目のパターンが、子どもが動物虐待を目撃するパターンです。【スライド 11】

子どもに動物虐待を目撃させる、その暴力を目撃させるということは、子どもの虐待に当たります。動物虐待だけじゃなくて子どもの虐待に当たります。

例えば、アシオンらが実施した研究では、普通の家庭とDVがある家庭で動物虐待を目撃したことがある子どもの割合を比較したものがあって、これによると、DVがある家庭では61.5%もの子どもが、自分の家庭で動物虐待を目撃したことがあるということがわかってます。これに対して、一般家庭はわずか3%しかそういう経験をした子どもがいませんでした。

同じようにデギューらが行った研究では、動物虐待を行った、もしくは動物虐待を目撃したことがある対象者の3分の2近くが何らかの形で家庭内暴力を経験したことがあると報告しています。

暴力を見せるということは、もちろん子どもの情操教育にいいはずはありませんが、家庭内でこれがやられているということは、被害に遭っている動物が子どもが大切にしているペットであるという可能性が非常に高いと言えます。

となると、子どもが自分が大切にしている動物を目の前でいじめられたらどう思うか。すぐ子どもの心の負担になることは間違いありません。

特に、虐待が行われている家庭では、子どもにとって動物が唯一の愛着対象、アタッチメント・フィギュアであることが多いので、本当に動物の存在が重要であることが多いんです。それを虐待されている現場を子どもを見るということは、本当に想像以上の負担であると考えています。

DVに関してですけれども、DVと動物虐待が関連しているということで、最もよく見られるパターンは、先ほどアーコー先生がお話しされたように、配偶者をコントロールするために動物を傷つけるというふうに脅迫したり、実際に虐待したりというパターンなんです。要は、旦那さんが奥さんのことを暴力振るっていじめているときに、それをばらしたらお前の犬殺してやるとか、お前もし逃げたらお前の犬も殺してやるといような脅迫を動物を使ってやるパターンがすごく多いんです。【スライド 12】

こういうことが研究では示されているんですけれども、例えば、DVのシェルターに避難してきた女性の46.5%が、配偶者に動物を傷つけると脅されたことがある。もしくは実際に動物を虐待されたことがあると回答しています。

この研究でも、それに一貫した結果が報告されていて、DVシェルターで支援を受けている女性の動物虐待の経験として、48.8%もの女性が動物を傷つけると脅された経験があると回答していますし、46.3%が実際に自分の動物を虐待されたと回答しています。

同じような研究、アシオンがやったものでは、DVシェルターに滞在している女性のほうが、DVを経験していない女性と比較して、11倍もの確率で配偶者に自分が飼っているペットを傷つけられている、殺されていることが報告されているので、本当にDVと動物虐待はかなり高確率で同じ家庭で発生していることが研究結果からも見てとれると思います。

これもフィル先生の話と若干かぶるんですけれども、DVと動物虐待が同じ家庭で発生しているがために、ペットの保護も女性の保護につながるんだという取り組みを紹介していただきましたけれども、まさにその取り組みの科学的根拠となるデータがここです。【スライド 13】

フリンの研究では、DVのためにシェルターに避難

してきた女性の約2割が、ペットの安全を心配したために自らの避難をおくらせたと回答しています。

同じような研究をしている、カーリスリーフランクらの研究でも、DVのために避難してきた女性の48%もが、ペットの安全を心配したために自らの避難をおくらせたと回答しています。

こちらと同じです。フェーバーらの研究でも、そういう女性の26.8%が、ペットの福祉の心配で自分の避難に関する決断に影響されたと報告しています。

なので、DVと動物虐待は、1つの家庭で存在した場合は、DVの被害者は動物が心配で逃げられない、なので自分の暴力も防げない、でも自分が逃げないと動物の暴力も防げないという、まさに暴力の悪循環のよい例になってしまうんです。

では、犯罪と動物虐待は具体的にどういうふうに関連しているかという話を少しいたします。【スライド14】

動物虐待と犯罪に関連しているという話をする際に、主に2つのモデルがあります。

1つ目のモデルが、ちょっとフィル・アーコー先生の話でも出てきた、グラデュエーション・ハイポセシスというものです。

このグラデュエーション・ハイポセシスによると、動物虐待は、動物を対象とした虐待が徐々にエスカレートして、凶悪犯罪などの対人暴力につながるという、動物虐待と凶悪犯罪の時系列的な関係を示すものです。動物虐待を卒業して、人間を対象とするという考え方です。

このグラデュエーション・ハイポセシスを支持しているデータもあります。【スライド15】

例えば、幼少期の動物虐待の経験を、凶悪犯罪で服役している人と、対人暴力を含まない、被暴力的な犯罪を犯して服役している人間とで比べると、こういう差が出るんです。凶悪犯罪で服役している人のほうが、幼少期に動物虐待をした経験が圧倒的に多いので、若いころに動物虐待していると人間の暴力につながるのではないかと、研究結果で示されているものもあります。

同じようにライトらが行ったケーススタディでは、有名な連続殺人犯などは大体幼少期に動物を虐待していることが報告されています。

幾つかの研究では、複数回の動物虐待が、特にその後起こる凶悪犯罪を予測する重要な変数であると示されています。

こういうことから、ここにあるような研究結果は、動物虐待は動物をいじめることから始まり、徐々にそれが凶悪犯罪などの対人暴力にエスカレートするのではないかと、このグラデュエーション・ハイポセシスを示すものになります。

一方、もう一つの考え方が、ジェネレイズド・ディビエンス・ハイポセシスというものです。このアプローチは、動物虐待とほかの凶悪犯罪などの対人暴力の間に時系列的な関係がないとしています。動物虐待というのは、違法賭博とか薬物関連の違反とか放火とか、そうい

うようなさまざまな反社会的行動と一緒に次元に存在し、お互いリスク要因となり得るのではないかというようなことを示すのが、このジェネレイズド・ディビエンス・ハイポセシスという考え方です。【スライド16】

この考え方を指示する研究のデータもたくさんあります。【スライド17】

例えば、アールークらが行った研究では、この動物虐待から徐々にエスカレートして凶悪犯罪に行ってしまうという時系列的な関係は棄却する結果だったんですけども、動物を虐待した人間のほうが、動物を全く虐待したことがない人と比べて、5.3倍凶悪犯罪を犯す傾向があり、4倍窃盗罪を犯す傾向があり、3.5倍薬物違反を犯す傾向があることが報告されています。

なので、こういうような時系列的なストーリーはなくても、やっぱり動物虐待というのは、反社会的行動と関連があると示された研究結果です。

同じようにルシアらが行った研究でも、動物虐待は凶悪犯罪とかそのほかの窃盗罪のような、必ずしも凶悪犯罪ではない反社会的行動と関連していることが報告されています。

なので、現時点では、研究の観点からいうと、グラデュエーション・ハイポセシス、動物虐待から対人暴力にエスカレートするということと、あと動物虐待は数あるリスク要因の1つで、時系列的な関係がないということと、両方のアプローチを支持する結果があると考えられます。

もう一つ、動物虐待を定義したときに、社会的に容認されている動物の搾取とか暴力は動物虐待かという話を少ししました。【スライド18】

近年の研究では、どうやらこの社会的に許されている動物の搾取の形態も反社会的行動や犯罪に関連する可能性があるのではないかと示されつつあります。これがその一例ですけども、フィッツジェラルドらが行った研究では、屠殺場があるコミュニティと、屠殺の産業と雇用人数とか条件が似ているそのほかの産業があるコミュニティと比較した研究を行ったんですけども、その結果、一般的に凶悪犯罪に関連しているとされているそのほかの変数を全てコントロールした後でも、屠殺産業に条件が似ているほかの産業と比べて、屠殺のある地域では凶悪犯罪による逮捕率が、ほかの産業があるコミュニティと比べて著しく高かったと報告されています。

なので、社会的に許されている動物に対する搾取とか暴力でも、その暴力が容認されている空間や文脈を超えて波及効果を及ぼすのではないかと懸念されます。

これに関連して、先ほどちょっとお話した文化的に価値が置かれている動物に対する暴力も、犯罪と関連を示すものがあります。【スライド19】

例えばよく、これはすごく昔から言われているんですけども、動物を戦わせること、例えば闘犬とか闘鶏とかは、マフィアの資金源になったりとか、その場で違法賭博とか不法入国が行われていたりとか、薬物違反が

行われていたり、あと窃盗とかの温床になっていたりすると多くの人たちから言われています。

闘牛なんかも、特に闘牛で華やかなナレーションを伴ったものは、子どもの攻撃性を増加させると報告している研究者もいます。

あと幾つか行われている研究では、狩猟と反社会的行動の関連性を見ているものもあります。そういった研究によると、狩猟は器物損壊とか対人犯罪と関係していたりとか、あとペットの虐待、家庭の中で動物に暴力を振るうことと関係していることが示されつつあります。



ここからはどうして動物虐待が、反社会的行動のリスク要因として危惧されるべきものなのかということについて詳しくお話したいと思います。【スライド 20】

まず、今までの話の流れからは、至極当然なんですけれども、動物虐待は、あらゆる反社会的行動と同時、もしくは関連して発生することがあるので、そのリスク要因になり得る。要するに、動物虐待があるところには対人暴力が発生している可能性が高いので、動物虐待を発見すると、それに伴う対人暴力の早期発見とか予防につながるものが、1つ危惧するべき要因として挙げられると思います。

例えば、さっきのグラデュエーション・ハイポセシスですね、動物虐待から対人暴力にエスカレートするというパターンが正しい場合は、動物虐待は対人暴力を思いきり予測する要因になり得ます。対人暴力がエスカレートする前に動物虐待を発見すると、そのエスカレートする前に未然に対人暴力を防ぐことができるかもしれない。

一方、それに対向する考え方です、ジェネライズド・ディビエンス・ハイポセシスが正しい場合は、動物虐待はそのほかの反社会的行動とかなり密に関連しているということなので、動物虐待を発見することによって、芋づる式に、ほかに混在している反社会的行動を発見し、同じく早期発見につなげることができると考えられます。

家庭内の暴力についても、動物虐待というのは同じ家庭で発生する確率が非常に高いために、動物虐待に注意を払っていると人間に対する家庭内暴力の早期発見とか予防につながると思えます。

このスライドにお示ししているのが、今までの研究の結果から、特に要注意、危険信号という動物虐待の

特徴です。【スライド 21】

今までの研究結果では、特にこういう特徴を持っている動物虐待はやばいと言えます。

まず、1つ目の特徴として、動物虐待をしている動物が楽しいからという場合は、特に対人暴力につながるリスクが高いと研究では言われています。

ヘンスリーらの研究では、娯楽理由の動物虐待は、後の対人暴力を最もよく予測する動物虐待の動機だったと報告されています。

同じような結果で、ルシアらの研究では、動物に暴力を振るうのが楽しいと思っている人間のほうが、後に凶悪犯罪とか窃盗罪、そして動物虐待も犯している傾向が高いと言われているので、動物虐待を楽しむためにやっている、その特徴というのは特に反社会的行動への危険信号と言えます。

あと動物をひとりで虐待している場合、こういう特徴も研究では危険なのではないかと考えられています。

ヘンリーの研究なんですけれども、ひとりで動物を虐待したことがあると報告した人間のほうが、非行行為に従事していた傾向が高いことが示されています。

これ、その研究からのデータなんですけれども、非行得点というのは、高いほど非行の傾向があることを示しているものなんですけれども、動物虐待を全く経験していない人は非行得点が8.6点。動物虐待しているけれど、ひとりでやったことがないという人は10.1点。ひとりで動物虐待をしたことがあると回答した人が一番高く、13.5点となっているので、ひとりで動物を虐待することも、危険信号の特徴の1つと研究結果からは言われています。

もう一つ、特に要注意の動物虐待の特徴は、複数回です。繰り返し動物虐待を行うことは危険と言われています。例えばタリチュットらの研究では、小さいころに動物を複数回虐待した人間のほうが、複数回の対人暴力に従事した経験がある傾向が高いことが報告されています。【スライド 22】

同じく、ヘンスリーらの研究では、いろいろな変数の中、複数回動物を虐待していることが、繰り返される対人暴力を唯一予測する変数であると報告されたということで、複数回動物虐待を行っている人間は、反社会的行動のリスクが特に高いことが研究結果から言えると思えます。

動物虐待が、反社会的行動のリスク要因として危惧されるべき2つ目の理由がこれです。動物虐待が社会の弱者を対象とした暴力に対する許容範囲を広げる危険性があることが言えます。動物虐待がすぐに反社会行動につながらなくても、その人間の暴力に対する寛容度が上がってしまうことが研究結果から言えると思えます。

この研究結果はリンからの転載なんですけれども、動物を虐待した経験がある人間と経験がない人間を比べているんですが、この2つの群で、体罰として子どもをたたくことを許せるか許せないかということを開く

と、動物虐待を経験した人間のほうが、こういう体罰を許しやすいということがわかっています。【スライド 23】

同じく、夫が妻を平手打ちすることを許すか許さないかということに関しても、動物虐待を経験した人間のほうが、許容範囲が広いことがわかると思います。

なので、動物虐待はすぐさま反社会的行動につながるだけでなく、それにかかわった人間の暴力に対する許容範囲を広げてしまって、暴力により寛容な人間をつくり出す危険性があるのではないかと研究結果から言えると思います。

もう一つ、動物虐待が反社会的行動のリスク要因として危惧されるべき理由があります。【スライド 24】

それは、動物虐待の目撃です。アーコー先生のお話でも、目撃についてはちょっと触れられていましたけれども、動物虐待を目撃することは、目撃者の動物虐待や反社会的行動につながるんです。

なぜかという、社会的学習理論によると、人間というのは周りにいる人間の行動を見て、その行動を学ぶと言われているので、動物虐待を目撃してしまうと、その目撃者は動物虐待という行動を学習してしまう恐れがあることが言われています。

これを示した研究結果が幾つかあるんですけれども、例えばデグーらの研究では、動物を虐待すること、動物虐待の目撃が相関関係にあることが報告されていますし、ロバートソンらの研究では、動物虐待の目撃というのは、目撃者自身による動物虐待といじめ、双方を予測する唯一の変数として報告されています。

なので、動物虐待は実施することも悪影響、動物を虐待する行為自体も悪影響ですけれども、その行為は目撃者にも悪影響を与えるんだと念頭に置いていただければと思います。

特に、要注意な動物虐待の目撃の特徴というのが、研究上はこういうような特徴が挙げられています。【スライド 25】

まず要注意な特徴、1つ目として、何回も動物虐待の現場を目撃することはかなり悪影響を与えると考えられています。

複数回の動物虐待の目撃は、非行行為と関連していることが報告されていますし、動物虐待をより頻繁に目撃する人間のほうが、自らより深刻かつ頻繁に動物を虐待する傾向が高いことも報告されています。

もう一つ、要注意な動物虐待目撃の特徴が、家族とか友人とか、親しい人による動物虐待を目撃してしまうケースです。

親とか、例えば友人が行っている動物虐待を目撃してしまうと、目撃者が動物虐待に従事する確率がより高くなったりとか、あと親とか兄弟とか親戚、親しい人による動物虐待の目撃は、特に動物虐待の得点に関連していたことを報告している研究もあります。

もう一つ、動物虐待の目撃で危険なのが、若い頃に動物虐待を目撃することです。【スライド 26】

幾つかの研究では、動物虐待を目撃した年齢が若いほど、目撃と目撃者による動物虐待との関連性も強いことが報告されています。

最後に性別。これ、アーコー先生のお話にも出てきましたけれども、動物虐待関連で特にリスクが高いと言われているのは、やっぱり男児、男性なんです。動物虐待の目撃も同じく特に男児においてリスクが高いと言われていて、ヘンリーらの研究では、動物虐待の目撃と非行行為の関連性が特に男の子において顕著であったことが報告されています。

ということで、いろいろと研究結果を引用しながら、細々と難しい話をしてしまいましたが、ここで今までのまとめをして、締めくくりたいと思います。【スライド 27】

まず、もうここまでくれば、皆さん、頭の中にたたき込まれていると思いますけれども、動物虐待は、家庭内における暴力やそのほか犯罪などのあらゆる反社会的行動に関連していることが研究結果でも示されています。

関連しているので、動物虐待は、こういう反社会的行動の予防や早期発見に役立つリスク要因として機能する可能性が高いことが言えます。

さらに、動物虐待は、例え、こういうような反社会的行動にすぐさま直結しなくても、社会の弱者を対象とした暴力に対する許容範囲を広げてしまう恐れがあります。動物虐待を蔓延させることは、暴力に対して寛容な人間をつくり出すことを促進してしまうという懸念があると考えます。

最後に、動物虐待の目撃は、目撃者による動物虐待や反社会的行動と関連しているため、目撃者がさらにその後また動物虐待の行為に従事して、さらにそれを目撃して別の人がその行為を覚えてというふうに虐待の輪を広げて、周囲の人間にも広範囲で悪影響を及ぼす恐れがあると考えられると思います。【スライド 28】

こういうようなことがあるので、動物虐待を社会として許すことは、社会全体の暴力やそれに対する許容範囲、寛容度を広げてしまって、社会全体の秩序やモラルの低下につながりかねない、非常に危険な問題だと考えています。

私のプレゼンテーションはここで終わりにしたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

○山崎恵子 山崎さん、ありがとうございました。

何かとてもかわいらしい、これゴマフアザラシの赤ちゃんじゃなくて、白いペキニーズです。ちなみに、日本動物福祉協会からの保護犬でございます。【スライド 29】

先ほどのお話の中で、やはりいろいろと指摘をされて、本当に動物虐待は特に私たち、特に連絡会なんかではいつも言っているんですけれども、人間の福祉にかかわる方々に犬猫を大切にしてほしいというメッセージを伝えるつもりもないし、犬猫好きになってほしいというメッ

セージを伝えるつもりも一切ないんです。

要は、あなたたちがかかわっている人間の危険ファクターが動物虐待でわかるんだから、少なくとも関心を持ってちょうだい、ということだけを出したいと思うんですが、それを出そうとすると、あんたたち犬の人ねとか、猫の人ねというリアクションしか返ってこないところがすごく歯がゆいなと思います。

先ほど、山崎さんからいろいろ研究のいろんな内容で、過去にいっぱいやられているもの出てきましたけれど、本当に、例えば動物虐待した青少年を調べた研究では、70年代に同じ青少年で共通項が、例えば虚言癖、うそつき、盗癖、それからきれやすいという共通項目があったとか、要は症状なんです。

くしゃみをして発熱をしてというところでおっとと思う、その身体的な症状と同じように、動物虐待は人間の行動やあるいは社会的な環境の中で何か歯車が狂ってきたという1つの症状であると。

だからそれは、その症状に対応するお医者さんと同じような立場にいる人がそれに切り込んでいかなければいけない。そこの部分を社会にどうやってわかってもらうかということが、この分野の永遠の課題であると思っています。

反社会的行動と動物虐待の関連性

何故、動物虐待を反社会的行動の
リスク要因として捉えるべきか



ペット研究会「互」
Humane Society International
BCFキャンペーン・コンサルタント
社会福祉学博士
山崎佐季子

【スライド 01】

I. はじめに



- 近年、動物虐待と、対人暴力等の反社会的行動の関連性が、実証研究により示されている
- 本報告の概要
 - 動物虐待とは？概念の定義
 - 動物虐待が起こる背景
 - 動物虐待と対人暴力はどのように関連しているのか？
 - 家庭環境において（子ども虐待やDV）
 - 犯罪と動物虐待の関連性
 - 何故動物虐待を反社会的行動のリスク要因として捉えるべきなのか？

【スライド 02】

II. 動物虐待とは？定義

- 学術的研究において、最も頻繁に用いられている動物虐待の定義：

「意図的に動物に痛み、苦しみ、抑圧を与え、及びまたは動物を死に至らしめる、社会的に許容されていない行為」 Ascione & Shapiro (2009, 570)

- 社会的に許容されない行為のみ；行為の欠如を含めず
- Vermeulen & Odendaal (1993)は、動物福祉を侵害するあらゆる行為・行為の欠如を類型化し、列挙法による定義を提唱

⇒ 動物虐待とは、動物の福祉を何らかの形で著しく侵害する行為・行為の欠如

【スライド 03】

II. 動物虐待とは？種類



• 動物虐待の種類

- 1 身体的虐待
 - 2 心理的虐待
 - 3 性的虐待(bestiality: 獣姦)
 - 4 ネグレクト
- 動物を闘わせる行為

• 関連性に関する実証研究の大半は、①と④に焦点を当てている（ほとんど①）
• 日本の法律における罰則の対象も①と④に当たる行為

- 欧米では、動物虐待が重大な社会問題であるという認識が確立されている！
 - 動物虐待査察官（動物虐待の調査・逮捕等）
 - 厳しい罰則（例：オレゴン州、獣医師が動物虐待の通報義務を怠った場合、最高\$1000の罰金）

【スライド 04】

II. 動物虐待とは？定義の課題

- 対象： どういう動物を虐待すると「動物虐待」に当たるのか？
 - 「動物虐待」の対象は、哺乳類・鳥類のみか？昆虫などは？
- 虐待行為： どういう行為が「動物虐待」に当たるのか？
 - 行為の欠如は？
 - どの程度の動物福祉の侵害があれば虐待と言えるのか？
- 文化的差異： 文化的に許容されている行為は、動物の福祉を侵害するものでも、「動物虐待」に当てはまらないのか？
 - 闘牛・闘犬・その他祭事など、文化的に価値のある行事・伝統文化とされる行為
 - その他、屠殺・動物実験など、一般的に社会に容認されている行為

【スライド 05】

III. 動物虐待が起こる背景 その①

- 動物虐待全てを説明しうる理論は明らかになっていない
- 動物虐待が何故起こるかに関する理論
 - 共感(empathy) - 動物が置かれている状況等に共感できない者は、動物を虐待する傾向にある？
(Ellingsen et al., 2010)
 - 制御感(perceived control) - 子どもや動物に対する制御感が低い保護者は、保護者として適切な対処方法がわからないため、子どもや動物の行動を変容させるために不適切な対処法（虐待）をとってしまう場合がある(Sims et al., 2001)

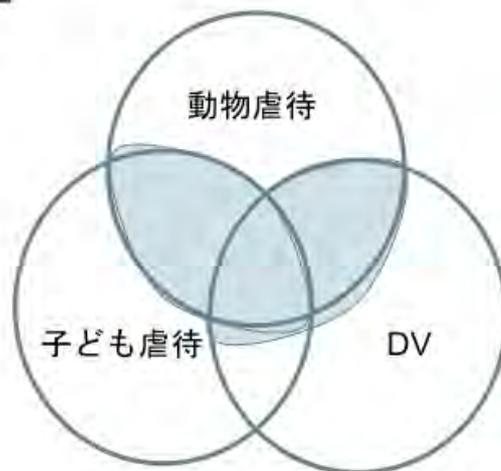
【スライド 06】

III. 動物虐待が起こる背景 その②

- 動物虐待が何故起こるかに関する理論（続き）
 - 緊張理論(strain theory) - 緊張やストレスが動物虐待を直接的・間接的に引き起こす。緊張やストレスがかかった者は、その軽減、その原因となった者への報復、それにかかわる負の感情に対処するために動物虐待を行う(Peterson & Farrington, 2009)
 - 動物虐待による脅し
 - スケープゴートとして動物を用いる（怒りのはけ口）
 - 社会的学習理論(social learning theory) - 動物虐待は学習された行動？動物虐待を目撃した者は、自ら動物を虐待する傾向が報告されている(Hensley & Tallichet, 2005; Yamazaki, 2010)

【スライド 07】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の関連性



Ascione & Arkow (1999)より

- 動物虐待と子ども虐待・DVは、同じ家庭に混在する傾向にあることが示されているが、全てのケースがそうであるとは限らない

【スライド 08】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の 関連性 — 動物虐待と子ども虐待①

- 子ども虐待の加害者が動物も虐待する(Boat, 1995)
 - DeViney, Dickert & Lockwood (1983) : 子ども虐待でニュージャージー州ファミリーサービス部局の指導を受けている家族の約60%が何らかの形で動物虐待を行っていた
 - Robin et al. (1984) :

ペットを他人に殺される経験をしている子どもの割合	
虐待を受けていない子ども	12%
被虐待児	34%
 - Zilney & Zilney (2005): 子ども虐待が疑われた家庭では、動物の状態も良好ではない

【スライド 09】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の 関連性 — 動物虐待と子ども虐待②

- 子ども虐待の被害者（虐待されている子ども）が動物を虐待する
 - Ascione et al. (2003) :

動物を虐待したことがある子どもの割合	
性的虐待を受けた子ども	17.9%
比較群	3.1%
 - Yamazaki (2010) : 一般家庭の子どもより、虐待を受けた子どものほうがより深刻な動物虐待に従事する傾向を示唆
 - 動物を虐待した経験のある者のほうが、親に体罰を受けていた傾向がある(Flynn, 1999b)



【スライド 10】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の 関連性 — 動物虐待と子ども虐待③

- 子どもが動物虐待を目撃する

- Ascione et al. (2007) :

動物虐待を目撃したことがある子どもの割合

DVがある家庭	61.5%
一般家庭	2.9%

- DeGue & DiLillo (2009) : 動物虐待を行ったもしくは目撃したことがある対象者の64%が何らかの形で家庭内暴力を経験

→もしも、被害にあっている動物が、子どもが大切にしているペットであったら??

【スライド 11】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の 関連性 — 動物虐待とDV①

- 配偶者による動物を傷つけるという脅迫、もしくは実際の動物虐待

- Flynn (2000): DVのため、シェルターに避難してきた女性の46.5%が配偶者に動物を傷つけると脅された・実際に動物を虐待された

- Faver & Strand (2003): DVシェルターで支援を受ける女性の動物虐待の経験

動物を傷つけると脅された	48.8%
動物を虐待された	46.3%

- Ascione et al. (2007): DVシェルターに滞在している女性のほうが、DVを経験していない女性と比較して、11倍の確率で、配偶者に自分が飼っているペットを傷つけられている・殺されている

【スライド 12】

IV. 動物虐待と家庭における対人暴力の 関連性 — 動物虐待とDV②

- 配偶者による脅迫・実際の動物虐待が及ぼす影響
 - Flynn (2000): DVのため、シェルターに避難してきた女性の約20%がペットの安全を心配したため、自らの避難を遅らせた
 - Carlisle-Frank, Frank & Nielsen (2004): DVのため、シェルターに避難してきた女性の48%がペットの安全を心配したため、自らの避難を遅らせた
 - Faver & Strand (2003): DVシェルターで支援を受けている女性の26.8%が、ペットの福祉の心配が、自らの避難に関する決断に影響を与えたことを報告した
- ⇒ 動物虐待による暴力の悪循環



【スライド 13】

V. 動物虐待と犯罪の関連性①

- Graduation hypothesis (Arluke et al., 1999)



動物を対象とした動物から始まり、それを「卒業」して、人間を対象とした暴力にエスカレートする

【スライド 14】

V. 動物虐待と犯罪の関連性②

- Graduation hypothesis を支持する実証研究の結果
 - Merz-Perez, Heide & Silverman (2001):

幼少期の動物虐待の経験

対人暴力含まない犯罪	20%
凶悪犯罪	56%



- Wright & Hensley (2003): ケース・スタディーにより、Jeffery Dahmer などの有名な連続殺人犯が、幼少期に動物を虐待していたことが判明
- 複数回の動物虐待が特に後の凶悪犯罪を予測する重要な変数であることが報告されている(Tallichet & Hensley, 2004; Hensley, Tallichet & Dutkiewicz, 2009)

【スライド 15】

V. 動物虐待と犯罪の関連性③

- Generalized deviance hypothesis (Henry & Sanders, 2007)



時系列的な関係を問わず、動物虐待を含む様々な行為が反社会的行動のリスク要因となる

【スライド 16】

V. 動物虐待と犯罪の関連性④

- Generalized deviance hypothesis を支持する実証研究の結果
 - Arluke et al. (1999): 動物虐待⇒凶悪犯罪という時系列的な関係を棄却する結果を報告するが、動物を虐待した者のほうが、動物虐待の経験のない者と比較して5.3倍凶悪犯罪を犯す傾向があり、4倍窃盗罪（非凶悪犯罪）を犯す傾向があり、3.5倍薬物違反を犯す傾向があることが報告された
 - Lucia & Killias (2011): 動物虐待が凶悪犯罪と、その他の窃盗罪（非凶悪犯罪）双方と関連していることを報告



【スライド 17】

VI. 社会的に容認されている動物の搾取と犯罪の関連性①

- 社会的に許容されている動物虐待と犯罪の関連性
 - Fitzgerald, Kalof & Dietz (2009): “Sinclair Hypothesis”を検証するために、屠殺と犯罪の関連性を調査。地域社会における凶悪犯罪に関連していると一般的に提唱される変数を統制しても、屠殺産業に条件が似た他の産業と比べて、屠殺場のある地域では凶悪犯罪による逮捕率↑；特にレイプ等の性犯罪⇒社会的に容認されている「動物虐待」でも、その暴力が容認された文脈を超えて波及効果を及ぼすのでは？



【スライド 18】

VI. 社会的に容認されている動物の搾取と犯罪の関連性②

- 文化的に価値が置かれている動物に対する暴力と犯罪の関連性
 - 動物を闘わせることと関連が示されている犯罪
 - 1 マフィアの資金源(Gibson, 2005)
 - 2 殺人、違法賭博、不法入国(HSUS, 2011)
 - 3 薬物違反 (Merz-Perez, Heide & Silverman, 2001; HSUS, 2011)
 - 4 窃盗 (Merz-Perez, Heide & Silverman, 2001)
 - 5 闘牛：特に華やかなナレーションを伴うものは子どももの攻撃性を増加させる(Graña et al., 2004)
- 狩猟と関連が示されている犯罪
 - 器物損壊・対人犯罪 (Cooper, 2009; Flynn, 2002)
 - ペットの虐待(Carlisle-Frank, Frank & Nielsen, 2004)

【スライド 19】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動のリスク要因として危惧されるべきか①

- 動物虐待はあらゆる反社会的行動のリスク要因となりうる
 - Graduation hypothesis が正しい場合は、動物虐待は、対人暴力を予測する要因となり、対人暴力へエスカレートするのを予防する重要な鍵となりうる
 - Generalized deviance hypothesisが正しい場合は、動物虐待を発見することによって、芋づる式に、混在する他の反社会的行動を発見することができる
 - 動物虐待は、家庭内暴力とも混在するため、家庭内暴力の早期発見に役立てることができる



【スライド 20】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか②

・特にリスク要因として危惧すべき動物虐待①

1. 動物虐待の動機が「娯楽・楽しいから」という場合

- Hensley & Tallichet (2008): 「娯楽」が理由の動物虐待が、後の対人暴力を最も予測する動物虐待の動機
- Lucia & Killias (2011): 動物に暴力を振るうのが「楽しい・動物にとって当然の報いだ」と思っている者のほうが、凶悪犯罪・窃盗罪・動物虐待を犯している傾向が高い

2. 動物を一人で虐待した場合

- Henry (2004a): 一人で動物を虐待したことがあると報告した者のほうが、非行行為に従事していたことがある傾向があった

* $p < 0.05$

	動物虐待経験なし	動物虐待経験あり
	一人で虐待経験なし	一人で虐待経験あり
非行得点	8.6点	10.1点
		13.5点

【スライド 21】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか③

・特にリスク要因として危惧すべき動物虐待②

3. 複数回の動物虐待

- Tallichet & Hensley (2004): 幼少時代、動物を複数回虐待した者のほうが、複数回の対人暴力に従事した経験がある傾向が高かった
- Hensley, Tallichet & Dutkiewicz (2009): 人種、教育歴、在住地域などの変数の中、複数回動物を虐待していることが、複数回の対人暴力を唯一予測する変数であることが報告された



【スライド 22】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか④

- 動物虐待が、社会の弱者を対象とした暴力に対する許容範囲を広げる危険性 (Flynn, 1999a)

	体罰として、 子どもをたたくこと*	夫が妻を平手打ち すること*
動物を虐待した 経験あり	2.13点	15.6% が許せると 回答
動物を虐待した 経験なし	1.82点	5.4%が許せると 回答

* $p < 0.05$

(Flynn, 1999a)より転載

【スライド 23】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか⑤

- 動物虐待を目撃することは、目撃者の動物虐待及び反社会的行動につながる
 - 社会的学習理論(social learning theory) - 動物虐待は学習された行動？
 - ⇒他者による動物虐待は、目撃者にモデルを提供し、目撃者が暴力的な解決方法を学ぶ機会になる (Faver, 2010)
 - DeGue & DiLillo (2008): 動物を虐待することと動物虐待の目撃は相関関係にある
 - Robertson & Gullone (2008): 動物虐待の目撃は、目撃者自身による動物虐待といじめ双方を予測する唯一の変数となる

【スライド 24】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか⑥

- 特にリスク要因として危惧すべき動物虐待の目撃①
 - 1 複数回の動物虐待の目撃
 - Henry (2004b): 動物虐待の目撃と非行行為の関連性は、特に目撃者が複数回動物虐待のケースを目撃した場合に顕著
 - Thompson & Gullone (2006): 動物虐待をより頻繁に目撃した者のほうが、より深刻なかつ頻繁に動物虐待に従事する傾向がある
 - 2 家族や友人による動物虐待の目撃
 - Baldry (2003): 親及び友人による動物虐待の目撃が、目撃者が動物虐待に従事することに関連していた
 - Thompson & Gullone (2006): 親、兄弟、親戚及び友人による動物虐待の目撃のみが、動物虐待の得点に関連していた

【スライド 25】

VII. 何故動物虐待が反社会的行動の リスク要因として危惧されるべきか⑦

- 特にリスク要因として危惧すべき動物虐待の目撃②
 - 3 年齢
 - 動物虐待を目撃した年齢が若い程、目撃と、目撃者による動物虐待との関連性も強い(Henry, 2004a; Hensley & Tallichet, 2005)
 - 4 性別
 - 動物虐待の目撃と非行行為の関連性は、特に男児において顕著(Henry, 2004a)



【スライド 26】

VIII. まとめ①

- 動物虐待は、家庭内における暴力やその他犯罪などの反社会的行動に関連している
- 動物虐待はあらゆる反社会的行動の予防や早期発見に役立つリスク要因である
- 動物虐待は、たとえ反社会的行動に直結しなくても、社会の弱者を対象とした暴力に対する許容範囲を広げる危険性があり、暴力に対して寛容な人間を作り出すことを促進してしまう恐れがある

【スライド 27】

VIII. まとめ②

- 動物虐待の目撃は目撃者自身による動物虐待や反社会的行動と関連しているため、目撃者がさらに虐待行為に従事し、虐待の輪を広げ、周囲の人間にも悪影響を及ぼす恐れがある
- ⇒ 動物虐待を許容することは、社会全体の暴力や、それに対する許容範囲を広げ、社会全体の秩序・モラルの低下につながりかねない



【スライド 28】

ご清聴ありがとうございました！



【スライド 29】